

# 南方（南方・その他）

## 軍隊の思い出(三)

### 緒戦の思い出

長崎県 上原 勝 義

（旧姓 柳沢）

昭和二十（一九四五）年三月九日午後十時、フウトに集結した第五中隊は仏領インドシナ駐屯の仏軍を武力処理すべく一斉に行動を開始する。夜間演習に見せかけ、トラックに乗車、ライトを晃々と照らし街を後にする。二十分ぐらいでライトを消し隠密行動、乗車約一時間で下車して、暗夜の水田の畦道、漆畑の中を一晚中行軍する。

払暁を期してホンブン山上にある敵営を攻撃、

一瞬にしてここを占領する。敵は約二キロ後方にあるコーテツキに敗走、約一時間後に追撃に移る。今村兵長は追撃の先頭を路上斥候で進撃する。

両側は水田、その間に一本の道路があるのみ。

突如、前方の丘より一斉射撃を受け、今村兵長が腹部貫銃創で壮烈なる戦死を遂げる。この丘が仏軍の演習場兼野外陣地とは、私は特別任務を帯びた独立分隊の軽機の射手で、小隊長は英曹長、分隊長は館軍曹、望月伍長で、我が英小隊と敵との距離約四百メートル、敵の陣地は朝靄あさぎりに包まれ判然としない。小隊長と牛山兵長と私の三人で約四百メートル前進、敵情を偵察する。小隊長は起立したまま双眼鏡で、私等二人は中腰で敵陣を探る。

何にか、ちらつと動いた。「敵だ！」と叫ぶと同時に伏せる。敵弾が身辺を掠めてブスッ！ブスッ！と左右の土に突き刺さる。続いて二射小隊長の背負袋と飯盒柳に命中、牛山兵長の背負っている予備手榴弾五発の木枠の下部を貫通して背中をえぐる。私も飯盒を貫通される。恐れるべき命力だ。

さすがに歴戦の古強者、英小隊長は普段と変らず、沈着強胆、落ちついた声で「よいか動くな、絶対に動いてはいかんぞ、わしが合図をしたら三方へ散れ」と指示される。その間にも敵弾はブスブスと無気味な音をたてて前後左右へ土煙を上げる。「今だ散れ！」と命ぜられるままに僅かの凹地へ転び込む。

友軍も一斉に撃ち始めた。その間隙をくぐって本隊へ戻る。牛山兵長も軽傷でホツとする。弾丸が一センチ上だったら手榴弾を直撃し、五発が一度に爆発し、三人共木端微塵になるところだった。が何と運の良いことか。

細川第一小隊右第一線、英独立分隊正面、高橋第二小隊左一線にして攻撃する。しかも時が過ぎると共に各地で敗走した敵は全部この陣地に集結し、必死に抵抗し、一発撃てば幾十倍の返礼が飛来し、ついに頭も上がらぬ情況となる。三月とはいえ南国の日は暑く、昨夜一睡もしておらず、疲れと共に睡魔に襲われる。そして戦線は最も嫌う膠着状態となる。

午後二時ごろか、頭上を無気味なうなりをさせて砲弾が通過、百メートルぐらい後方で物凄い音と共に爆発、周囲の木立を吹き飛ばす。いよいよ敵は大砲を撃ち始めたかと小隊長の顔を見る。通過せる砲弾の音を聞いた英小隊長は「いかん友軍の大砲だ」といいながら擲弾筒手の原上等兵に直に信号弾を発射せよと命ずる。信号弾は中央高く発射され、味方の砲撃は一発でびたりと止む。

歴戦の古参兵が「やれやれ助かった。敵の弾だけで沢山だ。この上友軍の砲弾まで頂戴してはたまらない」と笑談をいう。大した度胸だと感心す

る。しかし敵弾は一向に減らず激しさを増すばかり。

午後三時ごろ、第二大隊長上野少佐殿が大隊本部と応援に駆け付ける。午後四時ごろ連隊長田副大佐殿が軍旗と共に到着。誰かが「軍旗が来たぞ！」と大声で知らせる。軍旗と聞いて疲労の体も再び元気を取り戻しちよつとずつにじりじりと敵陣へ、意を決した大隊長殿は午後五時、砲兵の掩護射撃と突撃を下令、弾雨の中を我れ先にと敵陣へ突入、第一線を突破する。この時小隊長の軍刀一閃見事な袈裟斬りを見る。かくして第二線も破り、朝より頑強に抵抗した敵もついに算を乱して敗走する。

水田の間を走る道路上を退却する敵を丘の上より軽機関銃で必中弾を浴びせる。敵はバタバタと倒れる。夕暮迫るころ戦闘は終わった。生れて初めての実戦だ、長い一日だった。ホット一息気がつけば四辺に友軍は一人もおらず、青柳君と二人のみで、逃げ遅れた敵を警戒しながら交互に後退、

小隊を探しつつ三十分後にようやく帰隊した。

虎の子といわれた軽機と射手二人がおらぬので小隊長殿以下全員が心配し、「あの弾の中だ、二人共どこかでやられたのか、目撃者はおらんか」と、館分隊長殿が戦友に聞いておったとのこと。そんなことは露知らず、最後の射撃もうまくいったので意気揚々と帰つたとたんに「この馬鹿者めが、今ごろまでどこへ行っておったんぞ」と小隊長殿に大声で叱りつけられる。過去三年間この人の怒つたところを見たこともない温和な上官だ。ましてや私は清化分遣八カ月間一緒におり、何彼とお世話になり、可愛がつてもらつた上官だ、申し訳なかつた。

翌日おそるおそるお詫びに行く。小隊長殿はニコニコしながら「柳沢、何か用事か」「昨日は御心配をお掛けして誠に申し訳ありませんでした。お詫びに参りました」と。小隊長曰く「やられたと思ひ心配しておったところへ二人が元気で戻つたので、やれ良かったと思つたとたんに叱りつけた。

気にせんで好い」そして「敗走する敵を撃つべく軽機を呼んだが肝心の軽機関銃がおらん。他小隊の軽機が盛んに撃っていたが実に見事で見ている胸がスートした。あの軽機の射手の技能は抜群だった」という。こう言われ撃つたのは自分でありましとは私の性質上言えなかつた。

それから一週間ぐらいして兵器の手入れ等で一日休養があつた。その時また小隊長に呼ばれる。「お柳沢か相変わらず元気が良いな。まあそこへ掛ける。今コーテツキ攻撃の戦闘詳報を作っているが、退却する敵を薙ぎ倒した軽機の小隊が何回調査しても不明だ。大隊本部の配属小隊に問い合わせても一小隊も二小隊もあの丘へは行つておらん。残るのは俺の小隊だけだ。柳沢、お前が撃つたのではないか」と問い詰められたが、「ハイそうですね」では直ぐには答えられなかつた。

#### 越盟討伐

昭和二十年三月十日、仏領インドシナに駐屯の仏軍は日本軍に武力処理され、翌十一日安南、ラ

オス等が一斉に独立を宣言する。

五月十五日、「明号作戦」は完了。ホット一息する間なく独立させたと思う安南の越南独立同盟が、何を勘違いをしたのか日本軍に武力抵抗を始める。せっかく独立させたのに飼犬に手を噛まれたような気がする。五月二十四日、第五中隊は単独でこれを討伐すべく行動を開始する。インドシナの五月下旬は暑い。連日三〇度を越し息を吸うのも嫌になる。吐く息荒く、ましてや雨期直前の暑さは格別だ。行動開始四日目からついに夜行軍になる。

越盟は奥地山岳地帯に幡居し、一般住民と判別出来ず、見えない敵を追うがごとし。北支以来の古参兵はゲリラ討伐も巧みだが、我々若年兵は体験も無く雲をつかむようだ。

五月二十八日午後四時、今日もまたゲリラを追つて行軍を開始す。二十九日午前三時、野営前方の部落まで約八百メートル、第一小隊長、細川少尉、第一分隊長、金井軍曹の一分隊が直ちに部落

偵察、私は第二分隊だったが軽機を持って同行を命ぜられる。隠密行動で部落へ入ったが犬に吠えられ始末が悪い。十五戸ぐらいの集落だ。包囲の輪を締め、出来得る限り温和に一軒の家へ住民を集める。

細川小隊長が習い覚えた安南語でしきりに談話すること十分ぐらいか、「日本は皆さんの国を決して占領するのでは無い。独立に協力をするのだ。誤解をせぬよう」との要旨らしい。住民は時々「ベゾイ(分った)」とうなずく。

母親が三才ぐらいの子供を抱いていたがこの子が震えている様子が変なので行つて見る。マリアアだ。私もマリアアでたまたま苦痛をするのですぐに分った。持っている「キニネイ」五錠ばかりを手渡す。母親が幾度か頭を下げる。悪い気はしない。しかし働き盛りの若者が一人もない。油断大敵というのが気は許せない。

夜も明けたので本隊へ戻る。戦友が朝食の用意をしてくれ、これを頂戴して眠る。日中はここで

休憩、出動準備をする。今日もまた昨日と同様暑い。指揮班より前方の部落へ兵補を偵察に出す。帰隊時刻になっても戻らず、指揮班長の菰田曹長がしきりに心配をしておった。

午後四時、金井第一分隊出発、十五分後、突如前方部落付近で機銃洋砲(ヤンポウ・散弾)の一斉射撃の連続音がする。間髪を入れず第一分隊の威勢の良い軽機、小銃の反撃だ。実に早い、胸のすくような攻撃だ。さすが金井分隊だ。銃撃と共に本隊も出動する。

銃声は十分ぐらいで双方共に止む。本隊で前方の部落を知っているのは細川小隊長と私の二人のみ。案内を申し出る。部落への道は両側を水田に囲まれ、水田の外側は南方特有の密林だ距離二百メートル、幅一メートルの一本道だ。金井分隊は全面の高地を占領する。一人でこの一本道を七十メートルぐらい通過した時一斉射撃を受ける。前後左右へ水しぶきが上がり水煙を浴びる。伏せる場所も無い。

水しぶきからゲリラは右側の山と判断、十メートルばかり移動前進し、腰だめで軽機を発射と同時に、本隊の擲弾筒の榴弾が同一カ所で炸裂、どす黒い煙が上がる。凄い威力だ。敵は早くも右側面へ移動して待機しておったのだ。一気に部落入口まで前進、土手に軽機を据え本隊を待つ。

銃撃は止んだ。部落内を見ると十メートルぐらい前方に心配しておった兵補が無残な姿でやられている。部落には一人もおらず、迷走している。明け方のことが思い出される。この部落民が皆敵とは思いたくないが現実はそうだ。怒りがこみあげる。本隊も無事通過して部落へ集結、兵補を手厚く葬る。

同分隊の奥田上等兵が軍用犬「アース号」を連れて私に話しかける。無口で自分から話しかけるのは珍しい。「明号作戦」の時、独立分隊で二十日間ぐらい一緒にいたので私より二年先輩だ。

「なあ柳沢、兵補は可愛想だったな。今花を上げて来たよ。可愛想だった」と繰り返して、「人の命

なんて分からぬものだなあ。避けて通れるものではないし」としみりと話す。「そうですな。上等兵殿のいわれるとおりですが。お互いに気を付けましょう」「そうだなあ」と。それから三十分、狭い山路を警戒しながら私は軍用犬、奥田上等兵の順で前進する。

突如、三度目の襲撃を受ける。越盟にすれば自分の庭も同じだ。先回りしての待ち撃ちだ。素早く伏せて射撃姿勢に入った時、すぐ後方で「ウウーン」と悲痛のうなり声に振り返る。私と奥田上等兵との距離僅か一メートル、二人の間の軍用犬「アース号」が頬から首を貫通され口から血を吐き、伸ばした私の足の上で戦死、この弾が奥田上等兵の腹部に命中する。

非情のようだが手当も出来ず、射ちながら後ろへ「第二分隊、奥田上等兵負傷、衛生兵前へ」と急報する。弾の飛来する中を伏せもせず笠原、小泉の両衛生兵が駆けつけ凹地へ移す。この銃声で、本部で打合わせ中の小隊長や小池分隊長も駆

け戻る。戦闘は十五分ぐらい、越盟は移動したのか引きあげたか元の静けさになる。

ようやく夕暮が迫り、間もなく暗くなる。先行の金井分隊と合流、ジャングルの中の山道をさらに前進、見えぬ敵との戦いである。こんな無気味なことはない。靴音をしのばせ、いつでも射てるように全神経を目と耳に集中する。庭に入っても気温はむし暑く鉄帽の下から汗が頬を伝って流れ落ちる。

三度目の戦闘をしてから四十分ぐらいか、後部の指揮班より「今しばらくすると渡河点になる、渡河には充分注意せよ」と、行軍の兵から兵へ連絡が伝わってきた。

私から第一分隊の後尾を行く中村上等兵に小声で伝えた時、目前の暗闇から軽機、小銃、洋砲の一斉射撃を受ける。距離約十五メートルの道の側に一本大きな木があった。右側は山、左側は約二メートル下ると小川だ。続いて二射目があり、直ちに反撃する。いつもならすぐに攻撃する第一分

隊の機銃小銃が発射せず、見えない敵の足音の方向へ軽機を連続射撃する。

第一分隊の山本伍長がしきりに金井分隊長を呼んでいる。ゲリラは逃亡したか弾は来なくなる。道下の川の中に誰かいるらしい。土手を飛び降り救出に行く。金井分隊長だ。体をゆすり小声で呼んだが答えは無い。中村上等兵を呼び、二人で道路上へ運び上げる。中村君が「金井班長殿！」と悲涙と共にしがみつく。沈着、剛胆、卓越なる指揮をした金井分隊長は腹部貫銃創でついに壮烈の戦死を遂げる。タイグエン省（ルーチュウ）東方約二キロの地点で年令僅か二十三歳。瀬川一等兵は小池分隊長が救出する。

山本伍長が同一地点で分隊長を呼び続ける。声を目当に行くとも山際の道路端に三人が倒れている。初めて山本伍長、長岡上等兵、鈴木一等兵の負傷を知る。重傷らしい山本班長に「しっかりしろ、柳沢だ」と励ます。自己の負傷をかえりみず金井班長の安否を気づかう。分隊長は「元氣だ」と答

える。小泉、笠原衛生兵が相ついで駆けつけ、暗夜で応急手当をして後方へ下げる。

第二分隊は前方を警戒、一瞬にして第一分隊は無傷は中村上等兵ただ一人になる。私の同年兵が三人やられる。憎むべき越盟だ。時刻はいつごろか熱かった夜も一陣の強風と共にスコールとなり、全身ずぶ濡れでガタガタと震えるほどの寒さだ。滝のごとき雨が体を叩きつけること一時間余り、スコールは去ったが越盟はどこか。

後方では戦死者、負傷者を運ぶ急造の担架も仕上ったらしい。軽機を握ったまま負傷者の安否を思う。このまま夜明けを待つのか、出発か、様々に頭の中を駆け回る。

幾時間過ぎたのか、もはや時間はさっぱり分からない。後方より出発準備の指令、第二分隊が先頭だ。小池分隊長が「俺が出る、後ろへ続け」という。生意気のようにだが「分隊長殿、路上斥候を出しましょう」と意見具申をする。分隊長は頑として受け付けない。既に分隊の先任の奥田上等兵重

傷、軍用犬戦死、第一分隊は全滅に近い。分隊長と同年の森山上等兵と二人で再び具申すれど聞き入れない。部下をこれ以上傷つけさせたくない、上官の思いやりだ。再三再四、強固に具申する。分隊長もしぶしぶやつと聞き入れる。

「私が出ます」と申し上げたら「お前は軽機の射手だ。お前を出す訳にはいかん。俺が行く」とまたまた逆戻りになりかねない。「今日、分隊長も見られたとおり、私は二回も狙撃されましたが絶対にやられません。安心して出して下さい」と願う。折よく指揮班より連絡係の下士官、水本軍曹殿が来られ、分隊長と打合わせた後やつと聞き入れられた。軽機を弾薬手に渡し、誰かの小銃を借りる。

幾多の戦闘にも紙一重で弾は避けてくれた。俺には弾は絶対にならないと自信がついたものの、そんな保証はない。越盟ゲリラを倒さなければ戦死した同年兵や負傷した戦友に申し開きができない。状況によっては単独で突入する覚悟はできて



いた。

「分隊長、出発します」と言う。分隊長が小声で「柳沢、頼むぞ単独突入は許さん。これは命令だ」と一言いう。前面は全部敵だ、私の後方三十メートルに森山上等兵、その後方三十メートルに二分隊、さらにその後方に中隊主力の順に前進をする。全神経を耳目に集め、足音を忍ばせ、真つ暗闇の狭い一本道を前進する。

渡河点だ。後方の森山上等兵に渡河点に来たことを知らせて「もし撃たれたれ必ず反撃するから来てくれ。五、六分過ぎても異常がなく静かだったら前進してくれ。渡河は必ず成功させるから」と伝えて、渡河点の土手にびたりと伏せ対岸をじつと見る。

小石を拾って川の中に投げ込む。突如川の中へ機関銃、洋砲（ヤンポウ）等が一斉に撃ち込まれる。素早く手榴弾の安全栓を引き抜き、信管を石に叩きつけ銃火目掛けて投げつける。対岸でグワーンと物凄い音と共にゲリラの銃火器はびたりと

止む。小銃を二、三発撃ち込み一気に渡河して土手に伏せる。

銃声と同時に森山上等兵二分隊も駆けつける。「柳沢大丈夫か」と声を掛ける。「異常なし。渡河成功」と告げる。本隊も無事に渡河終了。そのまま路上斥候で前進する。

ようやく長い夜が明けた。前進して小休止し、斥候の任を解かれた。渡河以後のゲリラの襲撃は無かった。

重傷の奥田上等兵、大腿部のつけ根を貫通の瀬川一等兵の壮烈なる戦死を聞く。身に数カ所の傷を負い、大腿部の貫通はひどく重傷の山本伍長、大腿部負傷の長岡上等兵、腕に負傷の鈴木君と三人の戦死者と軍用犬を急造の担架で中隊本部へ搬送する。

三十日十時ごろ、第二機関銃隊の警備地へ到着する。機関銃隊の好意で直ちに決死の騎馬伝令が二人、敵の中を本隊へ急行、午後二時ごろか一台のトラックが負傷者救護に到着、間もなく二人の

伝令も人馬共に汗と塵にまみれて無事帰隊する。山本伍長ほか二人の負傷者をトラックのボデーに乗せ、私も軽機を待つて護送する。

越盟に破壊された悪路をトラックは全速力、山本伍長の大腿部貫通銃創は最悪の瓦斯壞疽を起す。強いトラックの振動で激痛に苦しむのを励ます。スピードを落すようお願いしたが運転手も敵中で必死だ。一向にスピードは落ちない。しつかりしると元氣付けるのみだ。衛生兵も止血帯を締めたり、ゆるめたり、負傷者をじつと見守り、時々「しつかりして下さい」と元氣づける。

長岡、鈴木の両君は次第に元氣を取り戻したが、山本伍長は弱るばかりだ、ややもすれば失神せんとするのを衛生兵が大声で呼び起す。道中無事病院へ着く。警乗した私等は三十分ぐらい休憩して再びトラックで無事帰隊、戦友が皆待っていて、御苦労さんとねぎらってくれる。

その夜は三人の戦死者の安置された部屋で各々の同年兵が交代で衛兵をし、翌日三十一日中隊全

員で慰靈祭を行い火葬する。涙が止めどなく頬を伝わる。

この戦闘ではついに敵の姿は見えず、戦死四人、兵補を含む軍用犬一匹、重軽傷三人、実に無念残念だったが、この尊い教訓を生かしその後の討伐は順調に好転する。

あれから既に半世紀の歳月が過ぎたが、この討伐はなぜか記憶に残り、眼をつむるとまざまざと頭に浮んでくる。歳既に八十余今まで生きられたのも亡き戦友の加護と感謝し亡き戦友の御冥福を祈っている。

### 【解 説】

昭和十八年に入って南東方面の情勢が重大化するに伴って、第十九軍が新設され、仏印では新たに仏領インドシナ軍が編成され、昭和十七年十一月十日、南方軍の隷下に編入されている。

仏印に進駐していた第二十一師団は、最終的に第三十八軍（信兵团）として第二師団、第五十五

師団、第三十七師団、独立混成第三十四旅団と戦鬪序列にあり、かつ体験記筆者の入隊前分かれて比島に転戦していた歩兵第六十二連隊が仏印に戻ってハイホンに上陸、第二十一師団全部が仏印に集結を完了したのは昭和十七年の十二月のことであつたという。

体験記筆者の入隊は昭和十八年四月、松本第一五〇連隊に入隊、すぐ歩兵第六十二連隊の仏印派遣要員として夏服を支給され、三カ月の教育後の七月二十四日、仏印サイゴンに上陸している。

サイゴンに上陸すると筆者たちは汽車で北進、四昼夜、七月三十日早朝に歩兵第六十二連隊に到着、ここより筆者たちの仏印における苦勞体験が始まる。

今回の苦勞体験記の中心は明号作戦と越盟討伐である。

昭和二十年三月九日、松本俊一駐仏印大使がドクター仏印総督に、仏印軍と武装警察隊を日本軍の指摘下に置き軍政実施容認を示した最後通告を渡

すも、ドクター総督はこれを拒否。

このため第三十八軍が、仏印に武力処理を發動した。いわゆる明号作戦の發動である。

この日本軍の仏印武力發動で、仏印軍約四万五千人が降伏して捕虜となり、約五千人が中国雲南省に脱出したといわれる。

また越盟討伐はゲリラとの戦いである。